
道化の造った英雄譚

えそら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道化の造った英雄譚

【Nコード】

N8285W

【作者名】

えそら

【あらすじ】

朝霧 潤也はいつも通りの朝を迎えようとして、体が縮んでいた。もとい異世界に飛ばされサイカという人物に憑依していた。突然の異世界生活に戸惑いながらも割と高性能な体に浮かれたりして日々を過ごす異世界ファンタジー。

これは魔物も魔術も存在する世界で、朝霧 潤也がサイカとして生きていく物語である。

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

実在の人物及び団体とは一切関係ありません。

うん、やって見たかっただけです。特に気にせず本編にお進みください。

それではこの物語を宜しく願います。

プロローグ

人里離れた石造りの家、その一室で白いローブを着た女性は困ったように笑っていた。

アルビノの白髪を弄りながら、その赤い瞳は眼下に寝かされている少年に向けられている。

「固有能力の模倣、失敗。

魔術適正の模倣、不具合発生。

身体能力の模倣、上書きに一部成功。

経験則の模倣、限定的に成功。

知識の模倣、失敗。

総合再現率、約二割。

備考、異物混入の疑い有り。

結論　　失敗作だね」

笑みを絶やさぬまま、実験体である少年へと冷ややかな視線を送る。

彼女はとある人間と同じ存在を作り出すための研究をしていた。

いわゆるクローン技術。それも知識や経験すら同様なクローンだ。

しかし研究は順調ではなかった。

経験知識を持ち合わせたクローン体を作成することは可能だったが、あの人間の模倣はどうしても不具合が出るのだ。おそらくはクローンの対象である人間が生物としてあまりに逸脱しているためだと思われる。

そうして幾度も失敗を繰り返している内に、ふと妙な考えが浮かんだ。

一から作るうとして駄目ならば生きている人間を、あの人間の模倣になるよう作り変えてみてはどうか、と。

元の人間と言う不純物が入るのだから成功する可能性は皆無と解ってはいたが、貴重なデータが取れる可能性はある。加え気分転換も兼ね、その辺りの子供を掻っ攫い実験を施してみた。

結果のみ見れば手酷い失敗だった。一から作った方が断然 完成度が高い。だが実験中に死ぬと想像していただけに、生存した状態である程度の模倣に成功したのは驚きだ。中々に面白い実験結果が得られた。

失敗作ではあるが貴重なサンプルでもある。

「うーん、少し悩むけど……まあいいか。この程度の出来だしね」

にっこりと微笑み、少年の廃棄を決めた。殺す訳ではなく、ただ手放すだけだが。

「さて、そろそろ旅を再開しようか。興が乗り過ぎてつい長居してしまっただからね」

女性が部屋から出ていく。

後には実験体である少年だけが残っていた。

朝霧 潤也は日本人である。

高校三年生で、大学には行かず就職活動に勤しむ毎日を送ってい

た。

そして今日も朝が来る。これから始まるいつもの生活、頑張つて起きますかと眠気を無理やり醒ませて起き上がる。

起きたら石造りの部屋だった。

どうやら上手く頭が働いていないようだ。目を擦って眠気に喝を入れる。

改めて見渡した。特に変化なし。

(どこだよ、ここ)

潤也は昨夜、きちんと学生寮で寝ていた。

仮に記憶違いをしていたとして、友達の家などならともかく知らない場所と言うのは明らかにおかしい。

ならば残る可能性は、誘拐。

思わず何故？ と考えてしまう。

言いたくはないが潤也は貧乏である。資産家の親もいない。誘拐しても問題になり難いかもれないが、旨味もない筈だ。それに誘拐ならば縛られてもいないのは不用心ではないか。

必死に否定要素を並べ立てる。これだけ否定要素があれば大丈夫な筈、と冷や汗が流しながらも自分に言い聞かせた。

ともかく情報を得ようと周りを見渡し、ふと壁際に大きな鏡が目に付く。

そこには一人の少年が映っている。金髪碧眼の西洋人らしき12、3歳の子供で、なのどこか潤也の子供時代に似てなくもないような少年であった。

しばらく沈黙した潤也は、おもむろに手を動かした。鏡の少年も同様に手を動かした。

(んな阿呆な)

どうやらこの少年は自分らしい。

見渡す限りに広がる青空。八方を取り囲むように生い茂る木々。太陽の光を反射しながら流れる川。

石造りの家を出ると、そこは大自然のど真ん中だった。

自然豊かなのは結構なことだが、今の状況は勘弁して欲しい。

潤也が今いる場所は山の麓らしく、遠くに街が見えるのがせめてもの救いだった。その街も中世ヨーロッパかと言うような有様だが、人里が見えたことで潤也は幾分落ち着きを取り戻す。

とりあえずあの街を目指すことにした。

二十分ほども歩き続ければ、少年の体が割と体力があることに気付く。

足場の悪い道を進んでいるというのにほとんど疲れないのだ。ともすれば元の体より調子が良いかもしれない。

子供の体だから体力がない可能性を心配していただけに嬉しい誤算だ。同時に元の体とてバイトでそれなりに鍛えられていたと思っただけに、少し情けなくもあつたが。

不意に足を止める。

これが環境の違いから来るカルチャーショックって奴か、と軽く現実逃避する。

見慣れない生物と遭遇したが故に。

人型の茶色い巨体は二メートル半もの大きさを誇り、その手には錆びついた斧を持っている。下半身を薄汚い布で巻き付けた状態の半裸の巨人。

その顔は牙を生やした齧つ豚だった。

潤也の知識にある数々の物語の中に、この生物に該当する存在が居る。

名を、オーク。

地球上には存在しない架空の生物である。

「プギイイイイイ！」

オークは斧を振り上げながら突進してきた。

ビク、と体を震わせる。日本人である潤也にとって生存競争は縁遠い世界での出来事だった。それ故に体は恐怖で竦み、頭は真っ白になる。

力強く振り下ろされる斧。走馬灯のように、スローモーションに斧の刃が近づいて行く。

（ あ、これ死んだ ）

あまりに間抜けな感慨を抱き、全身の力が抜ける。

だからそれ以降の行動は、潤也の意思とは無関係に行われる。

斧を振り下ろさんとするオークの腕を掴む。斧を振り下ろす力を巻き込みながらオークとの体を入れ替え、軽く足を払う。それだけで大した力などなくオークの巨体が宙を舞った。そして顔面から地面へ落ちる。

骨が碎ける嫌な音が鳴り響き、大きな音をたてて巨体が倒れた。

潤也は倒れたオークを呆然と見つめる。
身動き一つしない。紛れもなく絶命している。

(んな阿呆な)

天を仰ぎながら思った。

潤也に武道経験はない。どころか喧嘩すらほとんど経験がない。
にも関わらず自分の倍ほどもある巨体を投げ飛ばした。大した力
も使わず技量のみで。

そこから導き出される結論、この体 物凄い。

(いや待って、その前になんでこんなオークみたいな生物が出て来
てんの！？ まさか此処は異世界でファンタジーだとも言つのか
！？)

否定できる材料はどこにもなかった。

代わりに肯定する材料なら割とあった。

とにかく此処に留まっても仕方がない。動くことにしよう。
だがその前に、オークの死体から斧を拾い上げた。その際に顔の
潰れたオークを直視して少し気分が悪くなる。

それでもこんな生物が出て来た以上、まだ危険な生物が周りに居
る可能性が高いのだ。武器がないのは心もとなかった。
斧は大きくて重いが両手ならそれなり程度の重量だ。
オークの死骸から意識を外して歩き始める。

変わり映えの無い森の中を早足で進む。

少しでもオークのような生物と会わず、街まで行こうと出した苦
肉の策だ。

そしてオーク遭遇からしばらく、横にある草が不自然に揺れた。

気になりその草を見た瞬間、草の中から野犬が飛び出して来た。口を大きく開けながら駆けて来る野犬。その速度は予想以上に速く日本人の朝霧 潤也では抵抗すら出来ず噛みつかれていただろう。しかし今の体は確実に防衛本能を働かせる。

体を捻りながら野犬の突進を躲し、すれ違い様に野犬の胴へと斧を一薙ぎした。驚くほどに味気ない手応えと共に、野犬の体が二つに分かれる。

「……ええと、本当に凄いなこの体」

潤也にしてみれば、野犬に襲われたと思ったなら既に終わっていたと言っ状況だ。自分が対処できたことが半ば信じられず現実感が湧いて来ない。

ただ後になるにつれて恐怖感が湧き、対処できて良かったと深く安堵する。

それから周囲を警戒しながら森を歩き進めて行った。

幸いしばらく危険そうな動物と遭遇することはなかったが、それでも幾度かは野犬に襲われることになる。勝手に体が対処してくれただため大事に至らなかったことが救いだろうか。

斧の重量を甘く見ていたことを痛感させられる。

少しの距離ならまだしも何時間も歩くとなるとさすがに疲労が溜まった。

それでも頑張った甲斐はあり、森を抜けることが出来る。
そこからの舗装された道は楽だった。特に襲われることなく安定して歩を進め、やがて街に到着する。

それなりに人の多い街だ。

当初は斧を持ったままで大丈夫か不安に駆られたが、街中には武装した人も居たので少し安心した。もともと仕舞っている訳でもなく手に持ったままなので、あからさまに見られてはいるのだが。

大通りを歩いている所為か大きな建物がよく目に付く。中世ヨーロッパ風の建物なためか三階建て程度でも充分に大きく見えるのだ。そして宿屋を見つけた。
そこで立ち往生する。

端的に言つて、金がなかった。

通りがけに武器屋らしき店を見つけたため、斧を売り払う手はある。だがそれも所詮は一時凌ぎにしかならない。しかも使い古されたこの斧が宿屋一泊分の金になるのか疑問だ。

とはいえ最悪 食事代くらいはなりそうだし、と考えていると一人の少女が潤也に向けて歩いてきた。

明るい茶髪は肩口まで伸ばされおり、瞳も綺麗な琥珀色をしている。柔らかな表情なら可愛らしいだろう顔を不機嫌そうに歪めながら、少女は潤也の目の前まで来た。

そしていきなり殴りかかってきた。
反射的に躲す。

「いきなり何!？」

「うるさい、避けるな」

低い音程で横暴を吐きながら潤也を睨む。
がっしりとその腕を掴まれ、凄い力で引っ張られた。

「とにかく行くよ」

抵抗しようとしても引き摺られるほど力強い。

体が反応し斧を振るいかけ、相手は女の子だと自制した。

困惑しながらも何故こんな状況になっているのか、そして何処に連れてかれるのか疑問が湧く。

「あのさ、何処に連れてく気なんだよ」

少女が僅かに振り返った。

「あんたの家」

その言葉で、体感温度が一気に下がる。

それはこの体の家のことだろうか。ならこの少女もこの体の知り合いか。だとするなら先ほどの馴れ馴れしさに納得が行った。

あまり考えないようにしていた。潤也はこの体本来の持ち主を、意識はせずとも殺して此処に居るのではないかと。

「……顔色悪いけど、大丈夫？」

「怪我とかは、ないよ」

「そう？」

そのまま少女に腕を引かれて歩いた。

本音を言えば潤也は逃げたかった。罪悪感からこの体の知り合いと顔を会わせるのに恐怖が湧いていた。

それでも潤也がこの体である以上、逃げられないことだとも思う。

やがて一軒の建物に辿り着く。

少女は潤也の腕を離し、ドアをノックした。

しばらくしてドアが開く。女性が出て来る。軽くウェーブの掛かった金髪に、柔和そうな雰囲気のある女性だったが、それを打ち消すように眼の下には隈が出来ていた。

「お待ちせしました。どちら様で……す、か？」

潤也を捕え、女性の蒼い瞳が大きく見開かれる。

「サイ、カ？」

この体の名前だろう言葉を呼びながら、震える両の手が伸びて来る。

優しく抱き締められた。

「無事で良かった……おかえりなさい！」

その女性は涙を流しながら喜んでいた。この体の、サイカと言う人物が帰ってきたことを。

「……………うん」

潤也は曖昧に頷く事しかできなかった。

女性の家まで潤也を連れて来た少女と別れ、女性に連れられるがまま彼女の家に入った。その際に斧のことは後で詳しく聞かせて貰うと言われ、斧を取り上げられる。

通された部屋は、現代風に言えばリビングだろうか。木製のテーブルが中心にある簡素な部屋だった。

そして室内には眩い金髪の、今の潤也の体より更に小さい少女が居た。必然的に眼が合う。

潤也を　　正確にはその体であるサイカを見て、いきなり少女は飛びついて来た。あろうことか「お兄ちゃん！」と叫びながら不意打ち気味だったため、慌てて受け止める。

「お兄ちゃんのバカあ！　遊んでたらいきなり消えちゃうし。待っても戻ってこない、探しても見つからないし！　どこ行ってたの！？　どうして今まで帰って来なかったの！？」

潤也に泣きながら罵詈雑言を浴びせるサイカの妹。その内容を聞く限り、サイカという人物は行方不明にでもなっていたらしい。

ぽかぽかと弱い力で殴ってくるのはまるで痛くないが、どうすれば良いのかわからず途方に暮れた。とりあえずされるがままになりながら、ごめんと謝りつつ背中をさすったりする。

サイカの中身が違うと言う罪悪感に胃が痛い。

何よりサイカの肉親、しかも年端も行かない少女を騙していることに穴があつたら入りたい気分だった。

仮初の妹をあやし始めてしばらく。不意に彼女は体を離れた。――

通り言いたいこと言ってすっきりしたのか涙もある程度は引いたようだ。

そして二人の傍らで見守っていた女性にサイカ妹が歩み寄っていく。

「お母さん！ もう消えたりしないようお兄ちゃんに説教してやって！」

その言葉で必然的にサイカの母親と確定したその女性は、苦笑いしながら妹を撫でる。

「落ち着きなさいユリス。まずどうしてこんなことになったのか聞いてからでしょ」

ユリスを諭しながら問いかけてくるサイカの母親。その視線に掌から冷たい汗が流れた。

「何があつたかは、自分でもわからないんだけどさ」

潤也自身、この身に起こった出来事について把握していることは少ない。

そしてサイカの中身が違うという事実は、どう説明しても昏倒無形。異世界とはいえ、潤也の他に憑依などと言う特異例があるとは限らないのだ。

それならいつそより現実的で起こり得る説明をした方が良いのでは、と考える。

「記憶が無いんだ。それもここ数日とかじゃなくて、俺がこの町でどう暮らして来たのかも覚えてない。自分の名前も知らなかった。

だから俺にわかることは、朝起きたら山の麓にある家に居たこと

くらいかな」

母親の顔が強張る。

ユリスも不安そうに潤也を見る。

潤也は早速二人の視線から逃げたい気分には駆られた。

「サイカ、どこまで忘れてるの？　もしかしてお母さんの名前もわからない？」

「……ごめん、わからない」

嘘は言っていないが、母親の悲しそうに顔を歪める姿を見て視線を逸らしそうになった。

「お兄ちゃん、私のことも忘れちゃったの……？」

「……思い出せない」

ユリスは今にも泣き出しそうになっている。

潤也も雰囲気を引き摺られて少し目頭が熱くなってくる。

二人の表情を潤也はもう忘れられそうにない。それ程　記憶に刻みつけられた。自分でやったことながら、度し難いにも程がある。

「あの、本当にごめん……」

思わず口をついて出た。

その言葉で母親はすぐ対面を取り繕い、潤也の頭を撫でた。

「ううん、気にしないで。記憶ならいつか思い出すかもしれないで

しよ。それよりサイカが戻ってきてくれたことが嬉しいもの」

記憶喪失は説明し易い。潤也にその理由があったのは確かだ。だがサイカの中身が違っているという説明を避けたその理由の根幹は違う。ただの保身だった。

例えばこの親子やサイカと親しい人から憎まれるのではないか。或いは珍しい実験動物にされるのではないか。そうでなくても突然の異世界で、何の道標も無い状態で不安だった。そんな危惧が、潜在的に潤也を保身に走らせた。

それを自覚した潤也は、すぐに吐き気を催す。サイカの母親に頭を撫でられていることで気分が少し和らぎ、同時に罪悪感が増えていく。

「お母さんはアーシェって言うの。そしてこっちがサイカの妹のユリス。」

もう忘れないでね」

「今度忘れたら……えと、叩くからね！」

ユリスが泣きそうになりながらもそう言い放った。

「うん、もう忘れないよ。大丈夫」

そんなユリスに作り笑いまでして白々しいことこの上ない言葉を吐いた。

体が重くなる気分だ。だが吐いた言葉はもう飲めない。

この日を境に彼は、朝霧 潤也であることを止め、サイカとして生きていくことに決めた。

あれからしばらく話し合い、サイカの罪悪感も少し落ち着いた頃。アーシエは前々から疑問だったことを問いかけることにした。

「ところでサイカ、貴方の持って来た斧はどこで手に入れたの？」

「森を歩いている時に斧を持った豚顔の巨人と出会ってさ。そいつ倒して奪ったんだよ」

あっけらかんとした息子の言葉に、アーシエはまず耳を疑った。

「凄いね、お兄ちゃん。それってオークでしょ？ よく倒せたね」

「俺も記憶なかったからびっくりしたよ。まさか倒せるとは思わなかったから」

そして屈託なく尊敬の眼差しを送るユリス。それにサイカは、本当にオークって言うんだなあと思いつつ答えを返す。

その兄妹の会話を聞いて、アーシエは自分の頭が狂ったんじゃないかと疑った。或いはサイカが嘘を付いているのでは、と考えた。

ただ改めて思い返せば、山の麓にある家から帰ってきたとサイカは言っていないかったか。

この近くにある山と言えばフィリアス山だ。その山の麓からこの街まで行くとなると、どうしても魔物が多く生息する森を進まなければならぬ。仮にオークと会っていてもおかしくはないだろう。

「あの、サイカ？　ちなみにどうやって倒したの？」

「腕を掴んで足を払って投げた、のかな？　自分でもあんな芸当が出来るなんてびっくりだったよ。もしかして記憶失う前は武術かなんかやってた？」

アーシエは自分の頬が盛大に引きつることを自覚した。

「投げて倒したの？　魔術使って、とかじゃなくて？」

そんなアーシエの反応に訝しみ。次いで魔術という単語にサイカの興味の対象を持って行かれる。

オークがいた所からもしかしてとは思っていたが、本当にここはファンタジーな所のようにだ。

「投げて倒したよ。魔術のことも忘れてたから」

「そう、魔術まで忘れてしまっているのね。……でも武術なんてやらせたことないわよ？」

予想外の言葉にサイカは狼狽える。潤也が武道をやっていないため、必然的にサイカが体得していた技術だと思っていたのだが。

「狩りとかやって身につけてたりは……？」

「狩りなんて危ない真似させたことないけど」

憑依した拍子に力を手に入れたのだろうか。だがその力が技量となると、どんな要素で手に入れたというのか。

サイカは行方不明だったらしい。その間に潤也が憑依し、武術を身に付けるだけの何かが起こったのだろうが、何が起こったのかは検討もつかない。

その事実サイカを少し不安にさせた。

「……考えても解らないことならもうやめておきましょうか。深く考え過ぎると垣塙に嵌るもの」

「かも、しれないね」

「じゃあ気分転換に魔術を覚え直そうよ、お兄ちゃん。確か忘れてるんだよね？」

「そうだな。基礎からわからないんだけど、教えてくれるか？」

ユリスが明るく頷く。

気分が憂鬱に入っていた時に興味のある魔術を覚えてくれるというのだ。正直ユリスの提案はサイカにとって渡りに船だった。

「魔術を使うには魔力が必要なんだけど、お兄ちゃんは感じ取れる？」

「感じ取れないかな」

「そこからとなると………確か、眼を瞑って体内に意識を向ければ、その内 感じ取れるようになる、よね？」

「ええ、魔力を感じ取れない人は瞑想を何度もするの。それで一週間もすれば大抵は感じ取れるようになるわね。」

サイカの場合は魔術の使い方を忘れていただけだから、すぐ出来

るようになるんじゃないかしら」

「そっかな、やってみる」

言われた通りに目を瞑り、体内に意識を向ける。すると丹田と呼ばれる腹の下辺りに違和感、と言うより潤也の体にはなかった異物感がある。

これが魔力だとすんなり理解できた。

丹田を中心に、徐々に全身へと行き渡らせていく。体が暖かくなり、軽くなったような気がした。

「魔力流動の基礎まで出来るようになったみたいね。それで体を強化したりも出来るけど、魔力を使い過ぎると気絶するから注意が必要よ」

「わかった、気を付ける。にしても魔力だけでも結構便利そうだね」

「ええ、そうね。……そういえば魔力強化もなしにオークを倒したことになるのよね」

その非常識さにアーシエは眩暈がした。

魔力強化もなしに素手でオークを打倒する。そんな芸当は王宮の近衛騎士ですら出来ないだろう。

ただ改めて考え、サイカの言葉をもはや嘘と断じることが出来なくなっていた。

最近ある噂をよく聞くのだ。

曰く、道化がやって来た。

そこから予想される最悪の事態ならば、可能性はある。

彼女の実験にサイカが巻き込まれたならば、異様な力を付けているのは在り得る話だ。無論可能性は低いが、状況的に考えて無いとは言い切れなかった。

「それじゃお兄ちゃん、魔力が感じ取れるならアカシックレコードの末端に伸びる回線も感じ取れたよね。接続してみて」

「接続……？ いや、よく意味がわからなかったんだけど」

「魔力を全身に行き渡らせることで体内を把握することは出来たんだよね」

「なんとなく把握できてるね」

「なら体内に、こう異次元に伸びてるような回線がある筈だよ」

ユリスに言われ、瞑想して体内の把握に努める。

異次元に伸びているのなら異質な感じなのだろう。だがやはりサイカにはそう言った物は感じ取れない。どう体内を調べても、体内のみで完結している。

眉根を寄せて調べ続けるサイカに、ユリスも徐々に不安になって来た。

「お母さん、こついつ場合ってどうすれば良いんだっけ」

「それは……どうすることも出来ないわね」

その言葉で瞑想をやめたサイカは、苦虫を噛み潰したような表情をするアーシエを見て驚く。

実際サイカが躓いている段階は、魔術を習得する上で本来は在り得ない。魔力流動による体内把握と連動し、必然的に回線が見つかる筈なのだ。それが感じ取れなかったとするなら理由は一つしかない。

「魔術失陥なのでしょうね……原因は解らないけど、サイカは魔術を使えなくなった、と考えるべきなのかしら。」

あ、でも大丈夫よ。200年前ならいざ知らず、今は魔術が使えなくても特に問題にならないもの。この国の初代国王陛下なんて魔術どころか魔力も扱えなかったのよ。それでも皆から認められていたって言うし、気にすることはないわ」

安心させるように言葉を募っていくアーシエを見て、逆に不安が煽られた。

この時、この世界に対する知識が多少でもあれば、アーシエの言葉は安堵する内容だったかもしれない。だが日本人であり魔術などまったく知らなかった潤也にとって、あの内容は精神を落ち着ける意味では逆効果だった。

魔術失陥というのはアーシエの言葉から推察するに、昔は差別の対象だったようだ。そしておそらくは、今でもそれはある程度続いているのだろう。

サイカとしての生活に、少し不安が残った。

街の人々は寝静まり、森の夜行性生物たちは犇めき始めるような真夜中。フィリアス山の麓には石造りの家があった。

外装内装共に上手く整えられている。少なくとも一見では悪くない造りと思えてしまう、だが眼を凝らしてよく見ると所々で荒さが目に付いた。

しかしこの家が即興で、それこそ物の数分程度で造られた家だと知れば、気付いた者はそのあまりの異質さに言葉さえ失うだろう。

だが今家の中に居た人物、アーシエにはそんな事実など気付いても関係がなかった。

この家全体に残留する魔力を感じ、ギュツと拳を怒りで震わせる。この魔力をアーシエはよく憶えていた。

二年前、とある辺境の村が人知れず壊滅するという事件があった。そして村人の居なくなった村には歪な魔物達が蔓延り、国はその魔物達をすぐに殲滅する。

その後、村壊滅の原因調査が始まった。調査団の中には、高名な魔術師でもあるアーシエもその調査に参加していた。

そして調査の結果、魔物達の正体は村人達の成れの果てだったことが判明する。

A（傾国）級 犯罪者、道化師マルグリット。彼女の実験のために、村は壊滅していた。

この石造りの家からは、あの道化師の魔力が濃く残留している。

これでサイカがマルグリットの実験体とされていた可能性は、かなり高まった。ほぼ確定したと言っても良いかもしれない程に。

一歩間違えればサイカは死んでいただろう。もしマルグリットの実験が最悪な結果だったなら、そう考え恐怖に身が震える。彼女の実験に掛かりながら、本当によく五体満足で生きて帰ってくれた。

ただ叶うならば、物理的に無理だろうことは解っていないながらも、道化師マルグリットを地獄の底まで引き擦り降ろしたかった。

そうアーシェが想ってしまったことは、一人の親として仕方がないことだった。

プロローグ（後書き）

プロローグとプロローグ2を合併しました。

1話 孤児院にて

塀に囲まれた土地の、鉄格子の扉の向こうには白く長い面積を誇る建物が見えた。街の中心部から外れた位置に座すこの土地は個人経営の孤児院である。そしてアーシェの生まれ育った家でもあるそうだ。

サイカとユリスはその孤児院へ遊びに行くことになっていた。元より暇な時は兄弟でよく孤児院に遊びに行っていたそうだ。

ちなみにアーシェはここ最近で溜め込んでいた仕事に明け暮れている。と言うのもサイカが行方不明になっていた5日間、ほとんど仕事が手に付かなかつたらしい。そして貯まりに貯まった仕事を消化するため今は修羅場なのだそうだ。

孤児院の中に入ると、黒い執事服を着た爺が出迎えてくれる。灰色の髪と瞳が目につく老人で、兄妹の来訪に笑顔になることで顔の皺を更に際立たせた。

孤児院を個人で経営しているだけはある、執事を雇う余裕があるらしい。この館の主は一体どれほどの資産家だろうと考えを巡らせる。

「ようこそ二人とも、歓迎します。特にサイカはよく戻ってきましたね。記憶を失くしている件に関してはアーシェから聞きました。ですが安心してください、皆良い子達ですからすぐ溶け込めますよ。……おっと、自己紹介がまだでしたね。私はジョシユア、この孤児院の主です。よろしくお願い致します」

「こちらこそよろしく申し上げます、ジョシユアさん。」

……ところで違ってたら申し訳ないんですけどその服って執事服

「ですよね？」

「造形は似ていますが違いますよ。もともと執事服を意識していないと言えば嘘になりますが。以前に執事をしていたことがありません。だから、その名残で執事服と似た服を着ていることは間々あります」

「そうだったんですか。すみません、変なこと聞いちゃって」

「いえいえ、服だけならまだしも、以前の名残で時折立ち振る舞いも執事のように成ってしまいますからね。勘違いされても仕方がありません。自業自得という奴です」

ジョシユアが穏やかに微笑む反面、サイカの背筋は冷や汗で濡れていた。

解り易い質問だったのは自覚している。だがそれでも失礼なことを考え、その心内を見透かされては苦笑いしか出ないのも事実だった。

「お兄ちゃん、そろそろ行くつよ」

「ん、そうだね。それじゃジョシユアさん、失礼します」

「じゃあね、ジョシユアお爺ちゃん！」

「ええ、ゆっくりして行ってください」

ジョシユアさんに見送られ、ユリスに促されて廊下を進む。

ちよつとした体育館ほどの広い部屋に着いた。特に何がある訳でもないが、これだけの広さなら運動だって出来るだろう。室内には

十数人の子供が思い思いに遊んでいるようだった。

入口付近にいた同世代であろう二人の少年が、サイカ達に気付き近寄ってくる。

片方は赤髪で野性的な少年だ。中でも特徴的なのは金色の瞳で、爬虫類の眼のように瞳孔が細長かった。

もう片方は肩より長い金髪の、碧眼の美少年だ。特に長く尖った耳はよく目に付いた。

さすが異世界と言えば良いのだろうか。

どうやら人類にも色々とあるらしい。ともすれば数種類に分けられていたりするのだろうか。

「よおサイカ、記憶喪失になったってのは本当か？」

赤髪の少年が話しかけてくる。

その隣では金髪の少年とユリスが「久しぶりだね」「久しぶりー」など挨拶している。

「実際に記憶がないからね。だから自己紹介とかあると嬉しいな」

「俺はイグルってんだ。別に憶える努力はしなくて良いぜ？　すぐ忘れられない名前になる」

そんな意味不明なことを言って意地悪く笑う赤髪の少年イグル。

そんな彼の頬を吊り上げる様は酷く似合うのだが、将来　悪人面になりそうだなと妙な感慨を浮かべた。

「僕はリオン。よろしく」

金髪の少年は柔らかな笑みを浮かべて自己紹介してくれた。

「うん、二人ともよろしく」

自己紹介はつつがなく終わった。

記憶喪失という嘘がすんなり吐けるようになったことに憂鬱になる。表面に出すような真似はしないが、これから自分どこまで嘘で塗り固めてしまうのか少し怖くもあった。

「さて、さっそく勝負と行こうぜ！」

「はあ、勝負……？ 勝負ってどんな？」

「魔術勝負！ どっちがより高度な魔術を使えるか競おうって訳だ。どうよ、まさかあの優秀だったサイカが逃げるなんて言わねえよなあ？」

「いや俺って魔術失陥とかで魔術使えないんだけど」

その瞬間、場の空気が凍った。

言った本人が狼狽えるほどに。

「あー、えとな、その……すまねえ」

「や、出来ればむしろ気にしないで欲しい」

「そう、か？ そんなこと言ったら本当に気にしないぞ？」

「俺はその方が嬉しいよ」

魔術失陥と言うのはやはり厄介なようだ。蔑むような視線は感じないが、同情するような視線は幾らか向けられるようだ。た。

「それなら魔術の必要があった時には遠慮なく言って欲しいね。僕もエルフの端くれだ。さすがにユリスには劣るけど、魔術にはけっこう自信があるんだ」

「もちろんあたしにはいつでも頼ってねーお兄ちゃん」

「ありがと、必要な時は声をかけるな。それにしてもリオンがエルフなら、もしかしてイグルもなんか特別な人類？」

「種族も忘れちまつてるんだな……まあ俺は特別っちゃ特別だぜ？ なんせ竜人族だからな。人類では最も希少な種だ」

「なんか凄そうな種だな……」

ユリスがエルフだと言うのは数ある物語の知識からなんとなく推測はしていた。だがまさかイグルが竜人族、名前からして竜の因子がある人と言う事だろうか。道理で眼が爬虫類な訳だと納得する。

「ところでイグルはさっき俺に魔術勝負を仕掛けて来たよね。それってとっておきの魔術を仕入れて来たってことだろ？ よければその魔術を見せてくれないか」

「えっ、そんなの見たいのか」

「とっておきなんだろ？ 見ない訳にはいかないさ」

「そ、そうか、見ない訳にはいかないか」

イグルから冷や汗がたらたらと流れ始める。

そもそもイグルがサイカに魔術勝負を挑んだのはかなり不純な理由だったりする。

実はイグルは魔術がこの上なく苦手なのだ。孤児院内でも屈指のしよぼさを誇っている。それに引き替え記憶を失う前のサイカは、この年齢にしては優秀な魔術師だった。

サイカが記憶喪失になったと聞き、友達として悲しく思ったのは確かだ。だがその想いは今は関係ないので脇に置いておき、問題は記憶喪失のサイカなら魔術勝負で勝てるのでは？ と思ってしまうことに尽きるだろう。そして魔術で初めて優越感に浸れるかもしれない、と突き進んだ結果がこれだった。要は自業自得である。

イグルの魔術を知るユリスは彼に憐みの視線を送る。心に深く突き刺さり凄く痛かった。

思わず目配せでリオンに助けを求めた。そんな視線に気付いたりオンは柔らかく微笑む。

「イグルの魔術は孤児院 屈指だよ」

「そうなのか？ なら本気で期待できるな」

（ハードル上げやがったあああああ！！）

期待を隠しきれない様子のサイカに、イグルは崩れ落ちそうになった。その体は怒りや緊張やらで小刻みに震えている。

よりにもよって孤児院 屈指の『しよぼさ』という単語を抜かせてくれるとは。お蔭で一気に崖っぷちである。

こうなれば魔力で補うしかない、とイグルは覚悟を決める。

竜人族という種は他の人類よりも魔力筋力ともに大きく上回っている。例え魔術行使が稚拙であろうと出力を上げれば見栄えは良くなる筈だ。

そしてイグルは魔術を行使する。

アカシックレコードの末端に接続。情報を取得し現実に出だし、此処に魔術を顕現する。

イグルは掌を大きく開き、初歩の魔術には不釣り合いなほどの魔力を注ぎ込んだ。

炎が燃え盛る。大人の拳ほどもある赤い火だ。

それは手品の方がまだ派手と言えるほどの地味さだった。

所詮は初歩、この世界のライター代わりの魔術である。いくら魔力を注ぎ込んだ所でたかが知れていた。

終わった、さよなら俺の威厳。イグルは静かに嘆いたと言っ。

「これが魔術かあ。凄いもんだね」

その言葉は初め、あまりの下手さに対する嫌味かと思った。だが火の魔術に向けるサイカの視線は興味の色が濃くある。

実際サイカはイグルの魔術に興味津々だ。少し地味とは思いつつも、初めて見る魔術に浮かれている。

「へ？ ……へ、へへ、まあこんな物だぜ！ まいったか！」

「ああまいった。良いものを見せて貰ったよ」

魔術を消して虚勢を張る。

良心の呵責に苛まれたが、素直な称賛を浴びることが出来たので結果オーライとした。

「ねえお兄ちゃん、もしかして凄い魔術もつと見たい？」

「うん？ そうだね、もつと色々と見てみたいな」

「それじゃ、あたしの飛び切りを見せてあげるね！」

魔術に対するサイカの好奇心を過敏に感じ取ったユリスは、張り切って魔術を行使する。

末端への接続を開始、奥深くまで潜り膨大な情報を取得し、現実^{キョウド}に顕現するための詠唱を口ずさむ。

「第四の状態を現し示せ、プラズムブロム！」

頭上に上げたユリスの手の上、五メートル近い巨大な青白い球体が形作られた。周囲に放電現象をまき散らしているその正体は、高エネルギーのプラズマである。

唐突に現れた大魔術に室内は関係なかった人達まで巻き込み騒然とした。そんな中、元凶であるユリスは屈託ない笑顔をサイカに向ける。

「どうかなお兄ちゃん？」

「あ、ああうん、物凄いね」

プラズムブロムのあまりの威圧感に、サイカは半ば放心していた。

「って和気藹々と兄妹トークしてんじゃねえ！ 室内でなんて魔術

使ってやがる！」

「ユリス、早くそれを消すんだ。間違っても放ったりしちや駄目だよ。絶対だからね！」

慌てて止めに掛かるイグルとリオン。こんな大魔術が放たれた日にはこの孤児院に巨大な風穴が空いてしまつと必死だ。

シルヴァ国屈指の魔術師アーシェ。そんな彼女の子供であるユリスはその才能を十全以上に受け継いでいた。

色鮮やかな花が咲く花壇や所々に生える木を見ながら、サイカは裏庭と言える場所を歩いていた。

同行者は居ない。ユリスはプラズマを作り上げたことでジョシユアに説教されているし、イグルとリオン共あの後すぐに別れた。そして立ち代り入れ替わりに室内の少年少女達から挨拶されたり、遊ぼうと引つ張られたり、実際に遊んで盛大に疲れたりした。

相手は子供と侮るなかれ。異種族の種族補正ないし魔力強化により体力が半端ないのだ。サイカ自身が子供の体である以上、相手に並みの成人男性以上の体力まで強化されては対抗など出来なかった。例えば駆けっこしたなら軽く最下位である。

今のサイカより遙か歳下の子にまで敗けた時など、これは早めに魔力強化できるよう練習すべきかもしれない。と焦りながら思索したものだ。

それはともかく疲れた体の骨休めも兼ね、現在は孤児院の敷地内

を適当に散策していた。

そして、ふと音が聞こえた。

耳を澄まさなければ聞き逃すほど小さい、風切り音のような音。それが断続的に響いてくる。

気になって音のする方向に行き、建物で死角に成っている場所まで足を進めた。

ビュオン、一層激しい風切り音が鳴る。

その場にいたのは少女だった。明るい茶髪で、おそらく同世代くらいで、昨日サイカをあの家まで連れて来た少女だ。

そして彼女はブラウスにハーフパンツというラフな格好で、武闘を踊っていた。

蹴りを放てば風圧で地面の砂が巻き上がり、腕を振るえば空気を引き裂く音が鳴り響く。馬鹿馬鹿しい程の力強さを問答無用に感じさせられ、目が離せなくなる。

この時サイカは、確かに彼女に見惚れていた。

「ふう……………それで、なんか用？」

唐突に武闘を止め、サイカに声を掛けて来た。

「えっ！？ ……あ、や、特に用があつて来た訳じゃないけど」

「じゃあ何の用もなくここまで来たんだ」

呆れ気味にサイカを見据え、彼女は魔術でピンポン玉程度の水球を作った。それを口に含み飲み込む。

飲料水の調達に魔術を使ったのだろう。やはり魔術は便利そうだ。サイカは緊張していた気持ちを落ち着け口を開いた。

「散策して立ち寄っただけだからさ。でも君にはもう一度会ってお礼を言おうと思ってたから丁度良かった。ありがとな、君のお蔭で無事に家に帰れたよ」

「そっぴや 안타記憶失っただけ」

「だから助かったよ。きっと俺一人なら家まで辿り着けなかった。ところで名前を覚えて貰って良いかな。本当に悪いんだけど、憶えてなくてさ」

「別に謝られるほど仲良かった訳じゃないけどね。シアフィール、適当に呼んで」

「ん、じゃシアで」

……安直、と呟きシアが半眼になる。

シアフィールという名を呼ぶには長かったので区切ってみたのだが、そこまで変だろっか。

「嫌ならやめるけど」

「嫌って訳じゃないよ。そう呼ぶ人もけっこう居たし」

「そっ？　なら良かった」

と思いつつ、それならどうして半眼になったのかと首を捻る。本当にただ単に安直だったからだろうか。確かに安直であることは否定できないが。

「ところでアンタ昨日、私が殴ったとき躲してたよね。魔術ばつかだと思つてたけど、割とそういうこともできんの?」

「自覚はないけど、そうみたいだね」

「ふーん?」

シアはサイカを観察する。

立ち振る舞いからしてやはり素人だ。武や戦に精通した人間とは思えないほどの棒立ちである。手加減していたとはいえ、どうして昨日避けられたのか解らないほど素人然としていた。

試しに拳を握り、軽く振るってみた。

突然の奇襲を認めたサイカの体は瞬時に脱力し、体を捻って半身になり拳を躲す。

あんな拙い体位から躲すその技量にシアは瞠目した。手加減していたとは言え恐ろしいまでの危機対処能力だ。

当のサイカ本人はシアの突然の奇行に啞然としているが。

「……ちよつと、待とう。どうして殴つたの?」

「少し試してみようかと」

「本気でやめてね!? 人間って割と脆い生き物だからね!? それ当たつたら死ぬからな!」

ちなみにサイカの言うそれとは武闘中であつたシアの拳である。

先ほどの手加減した拳位なら打撲程度で済んだらう。

冷静に思い返せばそれくらいは解つただらうが、今のサイカはいささか判断能力が低下していた。とはいえ殴ること自体を止めて欲

しいサイカとしては、どちらにせよ抗議していただろうが。

「それよりいつもならアンタらもう帰ってる頃だけど、時間良いの？」

「それよりって……まあ帰る時間は知らなかったね。一旦戻ってみるよ」

「そうすれば。じゃ、さようなら」

「ああうん、またね」

軽く手を振ってその場を去るサイカ。

それを見送りながらシアは、またね、と言っ言葉に眉根を寄せる。あの武闘を見たり、二度も殴られかけたりしたにも関わらず、またね、と言った。シアの人生でそれは割と珍しいことだった。

どうやらサイカは記憶喪失に伴い、性格からして変わっているらしい。

奇特な奴、と思いながら自分も部屋に戻ることにした。

「辛かったよー、足痛かったよー」

「よしよし、よく頑張ったね」

「うん、あたし頑張って耐えた」

サイカはユリスの頭を撫でる。

現在彼らは孤児院からの帰り道である大通りを歩いていた。

そしてユリスは精根尽き果てたかのように力なく歩いていた。

ユリスの話によるとジョシユアの説教は壮絶を極めたそうだ。何時間も正座させられ、延々と常識を諭されていたのだと言う。お蔭で説教直後は立てない程であつたらしい。

その所為か説教後ユリスの友人たちに快方されたが、ついぞあの広い部屋には戻れなかった。今でも痺れが残っているほどのだから、余程辛い説教だつたのだろう。

妹の有様を見てジョシユアには説教されないようにしよう、とサイカも心に刻んでいた。

それにしても夕方なだけあり、大通りにはそれなりに人通りがある。サイカ達と同様に帰路へと付いている人も多いのだろうか。

そう考えつつ辺りを見回すと、知った顔が二人並んで歩いているのを見つける。

「イグルにリオン？」

「あれ、サイカにユリス？」

「なんだ、もう帰る時間かよ？」

「うんそうだよ説教だけで時間が潰れちゃったよー。あたしがこんなに頑張つてジョシユアお爺ちゃんの有り難いお話に耐えてる中、二人は外で悠々自適に過ごしてたんだね？」

「お前のは自業自得だろうが。つか俺らもただ遊んできてたんじゃねえよ」

イグルの言葉が示す通り、彼らはただ遊びに行ったのではないの
だろう。それだけ彼らが今身に付けている衣服は物々しい。

イグルは軽そうな鎧を着こみ、剣を背負っている。リオンも皮の
鎧を身に付け、弓を担いでいる。まるでどこかに戦いに行つて来た
かのような装備だ。

「凄い恰好してるけど、二人とも何して来たんだ？」

「僕らは二人で冒険者やつててね。今回はウェアウルフを3匹ほど
狩つて来たんだよ」

「まだ駆け出しだから大した魔物は狩れないけどな」

「えっ、充分凄いつて。魔物を狩るつて命掛けなんだろう？ 俺はち
と自信ないかな」

「えー、でもお兄ちゃんオーク倒したんでしょ？ 冒険者くらい楽
勝だつてー」

ユリスの言葉にイグルとリオンが若干驚きつつも苦笑いした。

「そりゃ凄いと思うけどよ、あまり無理言つなつて。今のサイカは
魔術使えねえだろうが」

「違うよ！ 魔術使えなくなった後に倒してきたんだよ！」

ユリスの言葉に二人の苦笑いが固まり、沈黙が舞い降りた。

「……サイカ？ ユリスはそう言ってるけど、本当に？」

「うん、まあ……そんなこともあったね」

それにどうだ見たかとユリスが胸を張り、冒険者二人はあまりの予想外さに啞然とした。

サイカはと言えば、薄々感じてたけどユリスってお兄ちゃんっ子なんだなあと諦観の最中にいる。端的に言って自分が本物のサイカでないことの罪悪感がぶり返していたりした。

その間に冷静さを取り戻したりリオンはにこやかに笑う。

「サイカどうだい、僕たちと冒険者やらないかい」

「はい？」

「なるほど、それだ！ 俺たちと一緒に冒険者やろうぜ！ なに、魔術が使えなくても俺達にはリオンがいる。だから遠慮するなというかむしろ大歓迎だ！」

「はああ！？」

訳がわからない。というより唐突過ぎる。

ユリスは隣でふふん仕方のない奴め、と言った感じの表情をしているが、サイカとしてはその顔やめて、と言った心境である。

「……と言うのは冗談だけどさ。将来やることなかったら考えてみてよ」

さすがに突然すぎたかと思いいリオンはフォローを入れ、その言葉にサイカは安堵の息を吐く。

ちなみにイグルの「えっ」という呟きは聞こえなかったことにし

た。

そもそもサイカは冒険者がどういふ仕事かさえわからない。この世界のことあまり知らない。こんな状態で将来のことなど決められる訳がないのだ。

ただ少なくとも冒険者は魔物を狩ることがあり、それは当然命が掛かる。そんな危ない仕事をするのは少し気が引ける。

だが同時に冒険と言ふ言葉に心惹かれる部分もなくはなかった。より正確に言えば、この世界がどういふ世界なのか見てみたいという願望がないでもないのだ。

とはいえ元のサイカの身内から離れるような事はしたくない。それに命を危険に晒すのはやはり御免なため、冒険者をやりたいとまでは思えないのだが。

「ありがと、どうするかはわからないけど考えてみるよ」

「うん、まあ気負わずに考えて」

リオンの優しさが痛み入る。

イグルも「別に今から冒険者しても構わないんだぜ？」と口に出しつつ、意味あり気に横目で見て来たため、丁重に「御免こうむる」と笑顔で返しておいた。

「と、そろそろ門限がやべえわ。悪いけどもう帰るな」

「そうだったね。それじゃ二人とも、またね」

「そか、じゃあまたな」

「じゃあまたなー」

そうして兄妹と冒険者二人は別々の帰路に着く。

その兄妹の帰り道、ユリスと取り留めのない会話をしながらサイカは思った。

自分はこれから一体どう生きて行くのだろうか、と。

1話 孤児院にて（後書き）

妹とシアの髪の色を変更、というより交換しました。

2話 魔法具店

翌日も兄弟揃って孤児院行きと相成った。

ちなみにアーシエは相変わらず仕事の修羅場である。

今日は残念ながらイグルとリオンは冒険者しているらしく居なかった。

ユリスも同年代の友達、つまり十歳前後の少年少女達と遊んでい

る。

サイカは元のサイカと友人であっただろう人達と遊んだ。

ちなみに過去形である。今日はサッカーと言うまんまサッカーもどきの球技をしていたのだが、サイカは誰よりも早く体力不足でダウンした。魔力による体力強化を身に付けねば遊びすらままならないらしい。

むしろ怪我をしなかっただけ行幸か。人によってはただのシュートが殺人技にまで昇華されていたのだから。

それにしてもルールがあまりに地球のサッカーと似ていたのだが、これは偶然だろうか。もしかしたらサイカ同様、過去に地球から来た人が居たのかもしれない。そしてサッカーという球技を普及したのかもしれない。

地球か、と故郷に想いを馳せる。

日本に戻りたいかと問われれば、サイカは判断に迷うだろう。だが仮に戻りたいと思ったとして、本当に戻ろうとは思わない。

理由は幾つかある。

既に朝霧 潤也の体はなくサイカの体だから。

サイカの身内がこの世界にはいるから。

そして何よりも、朝霧 潤也の両親がとうの昔に死んでいたことが大きいだろう。

引き取って貰った親戚の人達にはそれなりに良くして貰ったが、家族ではなかった。

友人はそれなりに居たが、親友と呼べる人はいなかった。

ついでに言えば恋人もいなかった。

つまるところ朝霧 潤也には、大切だと胸を張って言える人が居ないのだ。

サイカは深く考えるのをやめる。

どうせ帰る当てもないし、潤也の体がサイカである以上は帰れない。

地球について調べたい気持ちがないでもないが、別に今すぐ調べようとも思わなかった。

それはともかく、現在は休憩がてらに孤児院の庭を出歩いている。建物の裏の敷地まで足を進めた。昨日同様、そこには四肢で大気を切り裂きながら武闘を踊っているシアがいた。

「こんにちは、シア」

サイカに気付き、シアが意外そうな表情をする。

武闘を止めた。

「アンタか。まさかわざわざ来るなんて思わなかったけど、何か用？」

「シアいるかなと思って顔を出してみた？ あるいは体を休めに来た」

「特に用事はなしと。訓練続けて良い？」

「どうぞお構いなく。」

「……俺っていい方が良い？」

「純粹にどつちでもいいだけ。でも訓練はするし、暇じゃない？
それで文句言われても困るからね」

「言わないよ。シアの訓練してる所は凄そうだし見てて飽きないだ
ろうしね」

「む……私って武術なんてやってないから我流だよ。そんな良い物
じゃないでしょ」

「そうなのか？ 素人眼から見るとさっきのとか凄そうだったけど」
「馬鹿力だからね。その所為で凄く見えるんですよ」

「そうか？ でも確かに力自体も凄いんだよね……あれって魔力で
強化してるから？」

「両方。素でも力は強いし、魔力強化も得意だからね」

シアは細身であり見た目はさほど力が強そうに見えないのだが、
どうやら見た目とは裏腹らしい。

「ちなみにシアって俺と一緒にの種族だよな」

「……私って、そんなに人族に見えないわけ？」

シアが怒気を孕ませた目でサイカを睨みつける。
背筋に冷たい物が走った。

「いえ決してそのような訳ではただの確認ですごめんなさい」

サイカは即座に謝った。

何か地雷を踏んだのかと大慌てである。

簡単に屈して威厳はないのかと言われるかもしれないが、冷や汗が止まらないので仕方がない。

そんなサイカを見てシアはため息を吐いた。

若干バカらしくなったとも言える。

「別に良いけどね。それがどうかしたの」

「それがって訳じゃないけど、俺っていま魔力強化を勉強中でさ。

それでシアって力が強いから魔力強化が上手んじゃないかと。端的に言えば魔力強化が上手くなるようアドバイス貰えないかって」

「それ種族関係ないよね？」

「……そつすね、ごめんなさい」

よく考えればシアは訓練をしているのだ。か弱い訳がない。

あの細身からは想像もつかない様な筋肉の付き方をしているのだろう。それなら素で力が強いのも納得だ、とサイカは自身でそう考え込ませることにした。

「魔力強化に対するアドバイスだっけ。アンタ魔力流動は出来る？」

「多少なら」

「なら常に魔力を体内で移動させ続けてみたら。魔力で全身を何週もさせれば、その内 自然に魔力強化が上手くなるでしょ」

「そういう具体的な練習はしたことがなかったな。うんやってみる！」

「じゃ、私も訓練を再開するから」

「ああ、ありがと！」

シアは武闘を再開し、サイカは壁際にあるベンチまで歩いて座った。

今のサイカでは集中しなければ魔力を扱えない。そのため立っているより体に力が入らない座った状態で魔力流動を扱う方がやり易いのだ。

シアはその姿を横目で眺めながらも自分の訓練に専念し始める。想定するのはいつも通りの一対多の戦闘。魔力で強化した四肢で仮想敵に全力の致命打を打っていく。

並みの者なら数分で倒れるだろう激しい動きを、しかしシアは涼しい表情で淡々と繰り返し続けていた。

相変わらずの力強い武闘だ。荒事には慣れていないサイカだが、あれだけの武闘を見せられれば自分も、と僅かながらでも思ってしまう。

それにせつかくの異世界、と言うには不謹慎だが。今のサイカは魔術が使えないのだ。せめて魔力流動くらい物にしたいという想いがあった。

丹田から魔力を引き出す。まずは胴体から頭へと魔力を移動させる。出来たら次に右腕に、そして右足に、続いて左足、左腕と全身をくまなく移動させ、そして頭に戻る。

たかだかこれだけの魔力流動で途方もない集中力を要した。

力任せに全身へ魔力を行き渡らせる方が遥かに簡単だ。それでさえ動きながらでは集中し切れず魔力強化を維持し切れないのだから先は長い。

泣き言を言っても前には進めない。

こればかりは地道にやっついていくしかないだろう。

気を取り直して魔力流動を起こし全身を移動させていく。流動させるコツを少しずつ掴みながら、その分だけ移動させる速度を速める。

全身を何週も繰り返し魔力を流動させる。

サイカはこの間、ただひたすらに魔力の流動のみを見つめ続けた。

魔力流動による体内での回転速度は上昇した。

長時間の魔力流動によりサイカは魔力をある程度は操れるようになっていた。これならば魔力強化しながらの運動も少しくらい可能だろう。

だが未だに荒い部分が多い。それを削るべく集中に集中を重ね、目さえ瞑り体内に没入し、体内で魔力を流動させていた。

「てい」

そのためにサイカは気付かなかった。あまりの集中により周りが

見えず、シアの手刀が頭に迫っていたことに。

しかしサイカの体は当然の如く察知し、サイカの意思とは無関係に首を傾げる。それだけでシアの手刀を避けてみせた。

「どうして目を瞑ってて躲せんのだよ……」

「どうしてチョップしてきたんだよ……」

互いにじと眼で睨み合い、しばらく膠着状態が続く。

やがて互いの言葉をスルーすることで互いに妥協した。

「私はこれで今日の訓練は終わり。これから買い物に行こうと思ってるけど、アンタはどうすんの？」

「それなら室内に戻ろうかな。魔力は減ったけど体は充分回復したからね」

ベンチから立ち上がり伸びをする。

長い間座っていたため、間接が硬かった。

「それにしても面白い物って何買いに行くんだ？」

「良い魔法具がないか見に行こうと思って」

「俺も行く」

あまりの切り返しの速さにシアは一瞬 啞然とする。

「……良いけど、室内に戻るんじゃないの？」

「それより魔法具 見てみたい」

さわやかな笑顔でサイカは言い切った。

現在サイカの興味は魔法具に集約されたと言っても過言ではなかった。

何せ異世界 特有の産物だ。例え見るだけでも十分に楽しめるだろう。

それに考えてみればサイカは未だ異世界のお店に入ったことがない。

この機会に家と孤児院以外を見て回るのも良いだろうと考えていた。

「そう、じゃあ、行こうか」

「さっそく行こう！」

サイカが楽しみにしているのがシアにも伝わってくる。

なんだか釈然としない気分であるし、何がそんなに楽しみなのかシアにはまるでわからなかった。だがまあ楽しんでるなら良いか、と気にしないことにした。

サイカとシアは連れだって魔法具店に入った。

店の内装は広く明るく、魔法具だろう様々な物品が見栄え良く並んでいる。

どうやら用途によって区分けされているようだ。商品の近くにあ

る厚紙には、その用途の説明が書かれていた。

サイカは近くにあった、先端に白い石が付いている黒い筒状の道具に目を向ける。説明書きには『ライト』と書かれている。日本で言う懐中電灯のような物だろうか。

それ以前に自分が何故この文字を読めるのか、と言う事にサイカは首を傾げた。

文字が明らかに日本語ではない。

角張った形態をした文字で、少なくともサイカの知識にはない文字体系だった。

けれど自然に読めてしまう。

この調子ならもしかすると、言葉も気付いていないだけで日本語ではないのかもしれない。

どうして知らない文字が解るのか。

サイカの体だからか、謎の高技術の恩恵か、はたまた別の要素があるのか。

考えても答えは出そうにない。

特に害もなさそうなので考えることを放棄した。

折角なのでライトを手取る。

ざらざらとした触感で重量は少し重めだ。品質では懐中電灯の方が上らしい。

それはともかくいざ点灯、と意気込んだサイカはすぐさま困り果てた。

スイッチがない。上下左右からライトを見回してもスイッチが見つからなかった。

物は試しと筒にはめ込まれている白い石に触れてみる。無反応。

「……………何やってんの？」

気付けばシアに変な目で見られていた。

「このライトの使い方がわからなくてさ」

「なるほどそういうこと、魔力込めれば点くよ」

シアの助言を参考に手先へと魔力を流動させる。此処までの時点で反応はなし。

ライト自体に魔力を移動させなければならぬのかと、手先の魔力を外に押し出すように流動させた。筒の先端から淡く白い光が発せられた。

「おー、本当だ光った」

「そんなので感動してどうすんの」

「珍しい物を使って感動するのは当然だって」

「珍しくないから。アンタが忘れてるだけでしょ」

魔法具なんて本当に知らないんだけどね、と思いつつも口には出さず値札を見た。

初魔法具記念に安かったら買って行こうと言う魂胆だった。

価格5000ダラム。

ちなみにダラムは日本で言う円である。

この値段はサイカが調べた限りの物価から鑑みてそれほど高くはない。だがサイカがこのライトを買うには少々足踏みしてしまう程

度には高い。何せ家に貯蓄されていたサイカの財産はおよそ6000ダラム。ライトに財産の大半を使い込む勇気はさすがになかった。所詮は13歳と判明したこの身だ。お小遣いはさほど高くない。当然だろう。

バイトってこの歳でも出来るのかなあ、と考えを巡らせるには充分な事件だった。

泣く泣くライトを手放す。

シアが店内の奥へと進んで行くようだったので大人しく付いて行くことにした。

着いたのは魔法具の中でも特に貴重な品が置いてある区画だ。

煌びやかな装飾品や刃物など特殊な魔力を持つ小さな品々が並べられている。とりあえずサイカの全財産の100倍以上なんて商品がざらにあった。

まだこの世界の物価に疎いサイカだが、さすがに手軽に触れるような気は起きない。

間違つて壊してもしたら大事なので見るだけで満足することにした。隣で何の躊躇いもなく手に取り品定めしているシアも居るが。しかもけっこう大雑把に扱われているのを見て少し冷や汗が流れる。怖い物知らずな年頃と言うにも限度つて物が……などと肉体年齢的には一歳年上だったりするシアに向けて失礼なことを思い浮かべた。更にシアの品定めは続き、次の商品に移る。

半透明で拳程度の大きさの玉で、玉内では空色が不定形に蠢いていた。

商品名『夢玉』。

近くに置いて眠ると不思議な夢を魅ることが出来る。

お値段700万ダラム。

空色の玉に対する説明書きを流し読みしたサイカはお金の世知辛

さに肩を落とす。

不思議な夢には興味を引かれるがとても買える値段ではない。そんなサイカを尻目に、シアは夢玉を持って受付の女性の所まで歩いて行った。

「すみません、これください」

「かしこまりました。700万ダラム頂戴いたします」

「はい」

白貨。この世界で最も高価なお金をシアは七枚ほど無造作に転がした。

十四歳程度の少女がこんな大金をさらって出すことに受付の女性はピクリと反応するが、すぐさま営業スマイルを貼り付ける。

「こちらが商品になります」

紙袋に詰めた商品をシアへと手渡した。

商品を持って戻ってくるシア。開いた口が塞がらないってこういう感じなのか、とサイカは悟りながらそのまま言葉を発することにした。

「……シアって金持ちなんだな」

「そうでもないよ。昔の貯金が残ってるだけ」

あれだけの大金を軽く出せるってどれだけ貯金が残っているのだろうか。もしかして孤児院に来る前は金持ちの家に居たのかと邪推してしまうサイカだった。

夕方に大通りを通って帰路に着く。

あの夢玉以降は何を買ってもなく二人揃ったのウィンドウショッピングだった。サイカは金欠にで、シアは興味をそそられる商品がなかったためだ。

買ひ物は出来ずとも、サイカとしては異文化に触れただけで十分に楽しめた。とりあえずお金が貯まったら何か魔法具買ってみようと思う程度には興味を惹かれている。

そして当然シアの買った夢玉も気になっていた。

「夢玉使ったら不思議な夢を見れるんだよなあ。あとでどんな夢だったか教えてね」

「別に良いけど、そこまで気になるもの？」

「夢玉自体も気になるし、700万もする品物だからね。どんな凄い夢なのか気になるよ」

「そんな物かな。まあ物珍しいのが見れば私も嬉しいけどね」

あまりに興味深々なサイカに、シアは小さく息を吐く。

確かにこの夢玉は高級品だ。不思議な夢見を体感できるというのは気になる。だがそれにしだってサイカのはいささか大げさ過ぎやしないかと思っただ。

「そんなに気になるなら後で貸しても良いけど？」

「え、本当に？ それは嬉しいけど、でも700万もする物だし本当に良いのか……？」

予想外のシアの言葉にサイカは狼狽えた。

夢玉は使ってみたい。だが借りるのは腰が引ける。だって700万ダラムだ。傷ついたらどうしよう。そう考えてしまつのは、潤也の時から小市民であったサイカの性と言えるだろう。

「当然私が使った後ね。場合によってはかなり先」

「貸してくれるってだけでも嬉しいよ。うん、そうだなせっかくだから楽しみに待ってるね」

「あと怖い系の不思議な夢なら押し付ける」

「あーうん、高いんだから簡単に手放すのはやめようか。というか怖いのが苦手なの？」

「好きではないよ。苦手でもないけど」

嫌な夢を見るくらいなら要らない。強がりでもなんでもなく、そんな単純な考えだった。

サイカとしてもそれは理解できるのだが、高級な趣向品を簡単に手放すなどやはり金銭感覚が狂っているのではないだろうか。未だにこの世界の物価を把握し切れていないサイカにすらそう思われているのだから、割と手遅れな所まで来ているのかもしれない。

「あ」

唐突にシアが声を上げた。

足までも止めていた。

そんなシアの様子に訝しみ、彼女の視線を辿る。

黒ずんだ赤髪の男性が、同じく立ち止まりシアへと視線を向けていた。

黒い厚手の衣服を着ており、歳は三十後半程であろう。男の厳しい表情から威圧的な印象を受ける。そして彼の右手の中指に填められた、ひたすらに黒い指輪が特に目を引いた。

「久しぶりだな、シアフィール。元気そうで何よりだ」

「……そうですね。お久しぶりです、アドリスさん」

「このタイミングで会ったのも何かの縁か。協力して欲しい件がある。準備期間はどの程度 必要だ？」

「今からで構いませんよ」

肩を竦めながら抑揚の無い声でシアは答えた。

どうやらアドリスという男はシアの知り合いのようだ。妙に硬い雰囲気や二人で醸し出している所為で、これがどういう知り合いか聞くのが戸惑われた。

「という訳だからここで解散だね」

クルッと振り向いてシアが言ってくる。

「あ、うん、そう……なのか？」

「そうなの、それじゃさようなら」

どういう事情なのか気になったが、変に引き止めるのもおかしいかと普通に返すことにした。

「ん、そっか。それじゃ、またね」

そう返事を返すと、手をひらひらと振りながらシアはアドリスの方へと歩いて行く。

アドリスの所まで辿り着き、二人で何処かに向けて歩き出した。その姿を途中まで見送って、サイカも再び帰路に着こうとした。

「あ、そだ」

そんな呟きと共に不意に振り返ったシアが、夢玉の入った紙袋をサイカへと放り投げた。

「えええ！？」

慌てて受け取った。落ちたら700万ダラムというプレッシャーを原動力に最大限の慎重さでしっかりと抱き止めた。

これは一体どういうだ、と混乱しながらシアを見る。

「持ち歩くの邪魔だからあげる。それじゃあ今度こそさようなら」

シアはすぐに止まっていた足を動かし始める。それを引き止める間もなく、彼女の後ろ姿をサイカは呆然と見送った。

そしてサイカが我に返った時、腕の中にある高級過ぎる品をどう扱うかで頭を痛めることになった。

表情が抜け落ちていくシアと、硬い表情を崩さないアドリス。並んで歩く二人の間には温かみの雰囲気と言う物が存在しなかった。

「それで例の件について聞いて良いですか？」

「そうだな、概要だけでも話しておこうか。」

この街に道化師が来たと言う情報は知っているな？ 今回の件と言うのは道化師の調査、及び可能性ならば捕縛だ」

「捕縛ですか。自殺するなら私を巻き込まないで欲しいんですが」

「心配せずとも私とてまだ死ぬ気はない。道化には出会わないよう調査するつもりだ。あんな化物を捕縛などとふざけているとしか言い様がないからな」

「アドリスさんも随分な言い様ですけどね。でも概ね賛成です」

道化師が関わっている。その事実にも関わらず、シアは自分でも意外なほど淡泊な反応だった。

彼女にしてみれば道化師とは、家族を殺し自身を孤児院に追いやった怨敵である。

少なくとも客観的に見て、彼の道化には恨みを抱かない要素が見当たらない。

だが実際は憎悪と呼べる程に上等な、或いは下等な感情などは胸の内になかった。

ただ道化師と関わるのは危険。そう思う程度だ。
何故こんなにも淡泊なのか、とは思わない。
理由はなんとなく解っている。薄々は勘付いていた。

要するに、シアフィールは家族に対する愛情が希薄だったのだらう。

思い返せば上辺だけの親しみで、家族ごっこみたいな関係だったように思う。

もっとも孤児院の住人達とはそのごっこすら成り立っていなかったりするのだから、当時はそれでもまだマシだったのかもしれない。しかしこうして鑑みると、つくづく情愛と言う物に縁がない人生だな、と苦笑した。

「それにしても君も運がない。このような場所で私に再会するなど、神に見放されているとしか思えんよ」

「まあ真つ当な神霊に祝福されるようなことはしてないですからね」

「それは確かに違いない。しかし本当に準備期間を設けなくても良いのか？ 今の住処から持って行く物はないと？ 別れの挨拶も不要か？」

「あまり荷物を増やしても仕方ないですし、それほど親しい人もいませんから」

2話 魔法具店（後書き）

旧2話を1話と旧3話に分散！
切りが悪かったのでツギ八ギしました。
結果が1話と現2話です。

3話 剣の特訓……の筈でした

「ウサギは寂しいと死んじゃうのよ」

唐突かつ場違いな言葉だった。

発言者は沢渡 瑞葉、十九歳。大学一年生。身長は女性の割に高く、プロポーションもモデルに準ずる程度には良く、茶髪に染めている髪は軽くウェーブが掛かっている女性である。

朝霧 潤也のお世話になっている親戚の子供に当り、姉代わりと言って良い人だ。

そんな彼女は高校の寮の門前で仁王立ちしていた。とりあえずウサギとか寂しいとか死んじゃうとかの雰囲気は微塵もないくらいには堂々としていた。

「瑞姉、寮に帰れないよ」

「家に帰れば良いと思うよ。っていつかあたしの言葉を無視すんなよ」

にっこりと華の様に笑う瑞葉。潤也が高校に入学する折、寮に引っ越したことが気に入らないようだった。しかもう高校三年生なので今更である。

あとウサギ云々をスルーされたこともご立腹の模様。

「でもウサギとか明らかに今関係ないよね？」

「何を言うか、あたしとか明らかにウサギ系じゃんか！ 寂しくて死ぬタイプじゃんか！」

「人參嫌いのウサギは居ないと思うんだ。あとウサギ語るならもつと背が低い方が良いんじゃないかと」

「寂しくて死ぬって所に着目して！」

寂しそうな雰囲気もまったくない。

だが仕方なしに、もとい無意味に瑞葉の言葉を潤也は信じることにした。柔らかく優しくに笑い、今の瑞葉に相応しい言葉を投げかける。

「大丈夫だよ瑞姉。寂しいと死んでしまうような心の病でも、この辺りの精神科ならちゃんと付き合ってくれるよ」

「真面目に会話して!？」

「いや瑞姉の一言目からそんなものは木端微塵だからね」

「そんなことはどうでも良いのよ。あれこれ言っても最終的にあなたが言いたいことは一つだけ、潤也家戻れ。これだけよこの家出弟が！ 姉に寂しい思いさせるとは何事か！」

「いや家出って。俺はこのまま社会に出て自立するつもりだけど」

「あたしより先に自立するとか生意気なことは後にして、潤也は弟らしくしてなさい！」

「自立だけで生意気とか瑞姉の弟像がとても気になるんだけど！
あと血縁上は他人だ」

「水も時には血より濃いのだよ！」

「それ訳わかんないよ！」

要約すると似非姉弟の会話は『家に戻れ』『嫌です』の二言で片付いたりする。このまま会話を続けても互いに譲らず平行線を辿るのだから本当に二言で十分である。

この遣り取りは二人にとって本当に代わり映えのない内容だ。もはや日常の一片とさえ言えるかもしれない。

とはいえ日常なんて物は連続しているからその日常であり、時として前触れもなく途切れて壊れることも多い。というより始まりがあれば終わりがあるので、いつか終わるのは確定的である。

だからいつか訪れる、或いはいつか訪れたかもしれない日常の終わりは例えればそんな可能性だった。

「訳がわからなくても良いよ」

とは言えそんな例えばの可能性など二人は露ほども思い浮かべない。まあ当然である。だからこれ以降もこの日常を二人は謳歌し続ける。具体的には潤也の背後に回り込んだ瑞葉が彼の首に腕を回し、見事なチョークスリーパーを決めていた。

「だから力付くで連れて帰る！ とりあえず夕飯食べてけこの野郎
！」

「ちよつと！？ 待つ、ぐる、じー！」

潤也はずるずると引きずるようにして連れて行かれる。

背後から伝わる胸の感触に焦っている所為もあり、抵抗虚しく瑞葉に良い様にされていた。

ただし苦しそうなのは本当である。元来チヨークスリーパとは苦しい技であるが故に。

そんな二人のじゃれ合いを背景に、世界は次第にその輪郭をぼやけさせて行く。

まるでピントが合わなくなって来たかのよう。

二人の声までもが遠い。

色彩が白く染まって行く。

それは所謂、夢の終わりであった。

サイカは目を覚ます。

ベッドから上半身を起こし、寝ぼけた状態で簡素な部屋を見回した。その見回した視界の内には、ベッドの近くに置かれた夢玉入りの紙袋もあった。

時間が経ち眠気も少し飛んで頭が働いて来る。

「……………そうか、夢か」

サイカはこの世界に来て、もっとも大きなため息を吐いた。

脱力感に苛まれながらサイカはリビング代わりの部屋に入る。部

屋のテーブルには既に朝食が並んでいた。パンにハムを挟んだ食べ物にミルクだ。

朝食を確認した所で、台所にて調理用具を洗っている母アーシエと眼が合った。

「あら、おはようサイカ。ちょっと待っててね」

「おはよう」

いそいそとアーシエは大きな椀に魔術で水を注ぐ。水道がないため魔術失陥のサイカ一人では顔を洗うにも他の人より不自由するのだ。そのためサイカとなって以来、家族に力を借りることは多々あった。

「はいどうぞ」

「……ありがとう」

椀とタオルを受け取る。

顔を洗うことすら他人に助けられるのは潤也の頃から経験がなく、慣れていない事柄で気恥しい。

サイカとしては外の井戸から水を汲み上げて顔を洗っても良かった。ただそれより早くアーシエが水を用意してくれるため、サイカもせっかくの好意を無碍に出来ず昨日も一昨日もこんな感じであった。

少し離れて顔を洗いタオルで水気を拭う。

使い終わった水はトイレまで行って流す。ちなみに当然だが水洗トイレではない。形こそ似通っているが、いわゆるぼっとんトイレという奴である。

ちなみにトイレの近くには手洗い用の受け皿があり、つい先日からその隣に水瓶が完備された。サイカが魔術失陥になる前は置かれる理由もなかった代物である。

ここで生活していると、文明の利器の偉大さと人々の優しさが毎に骨身に染みだ。

サイカが改めてリビングに戻る。

その頃には妹のユリスも来ており、アーシエと共にテーブルの席に着いていた。

「あ、お兄ちゃんおはよう」

「おはようユリス。寝癖すごいことになってるよ」

事実ユリスの金の髪は疎らに乱れ、中には重力に逆らい跳ね返っている髪束まである始末だった。

「うあー、ご飯食べたらずす」

と言いつつ手櫛で無駄な努力をしながらユリスは憂鬱そうに肩を落とす。苦笑いしながらテーブルの席に着いた。

「それじゃ皆揃ったし頂きましょうか」

「いただきますしょう！ 頂きます！」

「いただきます」

ユリスが一目散に食べ始め、次いでサイカがパンに齧りつく。最後にアーシエがゆったりと食事を取り始めた。

日本のパンよりはパサパサしているがまあ悪くない味である。パンの間にはハムだけでなくスラッグエッグの様な物も入っており、味が合わさって旨味が増していた。

「そついえば……母さん」

アーシエを母と呼ぶのに躓いてしまった。

潤也としての自意識が母と呼ぶことを戸惑ってしまったのだ。そもそも潤也は母を幼い頃失くしている。母さんなどと呼ぶこと自体に一種の気恥しさもあった。そのため不意に呼ぼうとした時、ボロが出てしまうことがあるのだ。

要注意、と自身に念押しした。

それはともかくアーシエに疑問である。

「今日はゆっくりしてるけど仕事休みなの？」

先日から今日までサイカ達が朝食を食べる頃にはどこかへ出かけていた彼女が此処にいる。しかもゆっくりしている。

朝食時であるこの光景は何気にも今のサイカには初めてだ。

「ええ休みよ。だからサイカ、これを機に剣術を学んでみない？」

だから、の前後が繋がっていないと感ずるのは気の所為か。

元のサイカが武術関連を学んでいたと言う話は聞かないから、その発言が余計に突飛に思えた。

「……えっと、なんでそうなったのさ」

「サイカはオーク倒した時、体が勝手に動いたって言ってたでしょ

う？ 自分の体なんだから、きちんと把握するべきだと思うのよ。それに街中でも物騒な場所はあるし、最低限でも身を守る術があった方が安心でしょう」

前のサイカであれば魔術があった。だがそれが失われた上に記憶喪失（と言うことになっている）のサイカは、原因不明の全自動体術を例外として考えると、客観的に見て酷く脆弱な存在である。

この街は日本ほど治安が良くない。

他の街に比べれば治安は良い方であるし、無用に他者を害する行為は基本的に罪に問われる。だがあくまでそれは現行犯の場合がほとんどだ。そして人死に出ようと民衆レベルの事は終わってしまったえば大抵は放置される傾向にある。

冒険者同士の争いも割と多い。盗人など裏通りに行けばそこらにいる。

比較的 平和な町とは言えこの現状である。魔術失陥のサイカには護身術くらいないと不安に思うのが親心であった。

「そう言うことなら。でも剣術を学ぶってことは、誰かに教えて貰えるんだよね？」

「私の知り合いに冒険者やってる人がいるから、その人に頼んでおいたわ」

既に過去形だった。

準備万全と言うか用意周到であった。

今日からやるうと誘うくらいであるし、予想して然るべきだったかもしれない。

「なんか、わざわざありがとう」

「どういたしまして。」

ユリスはどうする?」

「うえ!? あ、あたしは良いよ行っても邪魔しちや悪いし孤児院に行かなくちゃ友達と遊ぶから! だからあたしのは気にせず剣の特訓してきて孤児院から精一杯 応援するのがあたしの役割だからね!」

「そ、そう?」

どうやら来ない様である。

早口で拒絶している所から、もしかしたら行きたくないのかもしれない。

そして何故かサイカを潤んだ瞳で見つめ始めた。

「お兄ちゃん、あたし応援してるから………ちゃんとして生きて帰ってね!」

「やっぱ俺 行くのやめる!」

妹の尋常でない反応にサイカは即座に前言撤回した。

「駄目よ、吐いたセリフは飲めないものなんだから。それに怯えるような場所じゃないわよ?」

「だけど……でもっ!」

ちらっとユリスを横目に見る。

捨てられた子犬を見るかのような憐憫の視線とかち合った。

行ったらきつと地獄を見る。サイカは既にそんな未来予想図を脳裏に描き出していた。

「ああもう泣き言はまず行ってからにきなさい！ 何事も経験よ！」

どんな経験を積みされるのか戦々恐々である。

安請け合いかつ早まったかもしれない。

アーシエに意気揚々と連れて来られたのは芝生が敷かれた広場だった。

人はそれなりに居るが、面積が広いだけに人口密度は酷く低い。

サイカは室内で剣の稽古をするのかと思っていたが、どうやら道場なんてそうある物でもないようだ。見られるのは気恥しいが、せっかくなので稽古に集中して気を紛らわそうと心に決める。

「ほらサイカ、あの人朝に言った知り合いの冒険者よ」

「あの人が……」

サイカは自然と頬が引きつるのを自覚できた。

木刀を二本持った大柄な男がいた。肌は浅黒く、髪も墨汁を吸ったかのように黒く逆立った短髪で、瞳が深い黒。服装まで黒に統一した黒尽くめの男性だ。

ヤクザなど目じゃない程に厳つい顔は自然体にして鬼の形相と呼

べるだろう。泣く子も脇目を振らず逃げ出すような威圧感を纏い、その人物は腕組みし直立していた。

彼にとつての待ち人であろうサイカとアーシェに気付き、鋭い眼光を二人に向ける。純粹に怖い。

人を見た目で判断するべきではない。サイカとてその理屈は解っているつもりだ。だがそれでも出来るならば、剣のことなど忘れて回れ右したい気分だった。

そして非常に残念ながら、何事もなく冒険者の男の元まで辿り着く。

「ごめんなさい。待たせちゃったかしら」

「5分程度だ。気にするな」

「そう？　じゃあローレン。今日は息子をよろしくね」

「出来る限りはしよう」

旧知の仲同士の会話も程々に、アーシェは息子の背中を押し出した。

ローレンの前にサイカは立たされる。

「……サイカです。よろしく願いします」

「ローレンだ。まずはこれを持って」

「あ、はい」

一本の木刀を手渡される。ローレンの持つ木刀より短めで、サイ

力の体格には丁度良い大きさに思えた。

「どの程度動けるか見る。自由に打ち込んで来い」

そう言うローレンは魔力強化を一瞬で済ませ、臨戦態勢に入る。どっしりと剣を構えサイカを待ち受けた。

そんなローレンにアーシエは苦笑いする。

対面してすぐあれでは面喰うだろう。もう少し前置きを入れた方が良いのではと考える。だが既にやる気になっている旧友を見て、とりあえず邪魔にならないよう二人から距離を取った。

その間際に母親としてサイカに「がんばってね」と声援を投げかける。

(え、本当にいきなり稽古始めるの?)

戸惑いながらあたふたと剣を構え始めるサイカ。その型は潤也時代に見た剣道の構えで、木刀を両手で握り切っ先を正面に突き出す。ちなみにサイカに剣道の経験は全くない。ただ他に参考になる知識がなかったのである。

その構えにローレンは戦慄した。

眼を見開き、木刀を握る手に自然と力が籠もる。

サイカは剣は初心者だ。ローレンはアーシエからそう聞いている。同じ孤児院の出身であるアーシエの頼みに軽い気持ちで引き受けた。その行為は軽率だったと今では言わざるを得なかった。

サイカの構えはあまりに自然体である。サイカは割と考えなしに構えているが、体はその構えの真髄を自動的に実行し隙のない構えを取っていた。

結果、相対するだけでローレンは気圧される。どこに打ち込んでも返されるイメージしか持てないのだ。これほどの熟練者を前に自由に打ち込めなどと、少し前の思い上がった自分に強い憤りを感じるほどに。

（えっと、ローレンさん動かないけどもう打ち込んで良いんだよね？ というかローレンさんがとても真剣な表情でありがたいんだけどなんか怖い……！）

そしてサイカは剣を振るうべくローレンへと踏み込む。その踏み込みはあまりに異質だった。

予備動作がほとんどなく、初速から最速の踏み込み。円状の軌道を描く剣戟は無駄なくあらゆる動作の起こり始めが早い。結果、速度自体はさほど速くない筈にも関わらず魔力強化したローレンが、魔力強化すらしていない子供のサイカの踏み込みに明らかな遅れを取った。

躲すのは既に手遅れであり、木刀で防御するのも辛うじて間に合う程度の有様だ。だがそれでも防御は間に合った。その筈だった。しかしサイカの木刀は、防御した筈のローレンの木刀をすり抜ける。驚愕で思考が白に染まる。

けたたましい音と共に、魔力強化してさえ痛恨の打撃がローレンを襲った。

苦悶の呻き声を僅かに漏らし、二、三歩後ずさる。

ローレンは自身がどうしてやられたのかが理解できない。あまりの非常識さにしばらく自失してしまったほどだ。

ちなみにサイカも自分がどういう技を放ったのかが理解していない。ただ途中で変わった動きをした様な、という程度の認識だったりする。

「……見事だ。素晴らしい剣戟だった」

ローレンはサイカを心配させないよう痛みを瘦せ我慢し、笑みを浮かべながら称賛を口にする。

そんなローレンはサイカから見て、まるで獲物を見定めた獣の獰猛な笑みのようであった。まるでやり返さなければ気が済まないとも言ってるかのよう。サイカの全身が嫌な緊張に苛まれる。

盛大なすれ違いがローレンの外見が鬼の形相と言つに相応しいから仕方がない。

余談だがユリスがローレンに苦手意識を持っているのも全てこの凶悪な外見こそが元凶である。

「ど、どうも。……それより大丈夫ですか？」

内心では大丈夫でない方が保身に繋がりそう、などと邪なことを考えつつも一心心配しておく。

あの獰猛な笑み（サイカ視点）を見ているので俄然 問題ないだろうとは思っているが。

「気にするな。頑丈さには自信がある。」

それよりも、だ。ふざけるなよアーシエ。明らかにサイカの剣は熟練のそれだぞ」

「……私も実物見たの初めてだけど凄いわねー」

「お蔭で自身より剣に秀でた者に稽古を付けるなどとふざけた話になった。今度からは技量くらい正しく伝えてくれ」

「ごめん、気を付ける。……でも今日くらいは剣の稽古を付けて貰

いたんだけど、ダメかしら」

「残念だがサイカに稽古を付けられるほど、俺に剣の腕はないな」

これはもしかして逃げられるもといこのまま帰る流れだろうか、と半信半疑ながらもサイカは期待した。

だがローレンは義理堅い男であった。剣の稽古をすと言った以上、最後までに付き合うつもりであった。だからこそ彼は格上の者に相対するかのような面持ちで、手加減を捨てた。

「だからせめてとことん相手をしよう。今度は攻撃を当てても気にせず追い打ちをかけてくれて良い」 『ハルバド』

ニヤ、と強気に笑いローレンは魔術を行使した。

薄黒い肌が一段と黒く染まる。白い魔力光が全身から疎らに、淡く光りを漏らす。

全身硬化の魔術。今のローレンは岩と同程度の硬さを誇るだろう。木刀ではダメージなど受けよう筈もない。

そしてサイカは悟った。あの人やり返す気 満々だと。大人げなく容赦なくタコ殴りにする気なのだ。そんな間違った推論を、あの意味あり気な笑みを見てサイカは確信を持って信じた。

「サイカ、今度はこちらから行くぞ！」

(これは本気で迎撃しないと 死ぬ！)

不幸なすれ違いであった。

もしローレンが義理堅い男であるとサイカが気付いていたなら、あんな結末にはならなかったかもしれない。

しかしもう遅い。サイカが勘違いしたままローレンは彼に向けて踏み込んでしまった。采は投げられてしまったのだ。

ローレンがサイカへ木刀を振るう。力強くもきちんとした型が見て取れる堅実な剣撃だった。しかし殺る気になったサイカの体にはあまりに温過ぎた。

まずサイカはローレンの剣撃を自身の木刀で受け流し、すれ違い様でローレンの小手を射抜いて木刀を叩き落とす。そのまま流れるような動作でサイカも木刀を捨てながらローレンの腕を掴み、体の重心を利用し流れるような自然さでローレンの巨体を真上へと投げ飛ばした。

中空に投げ出され、驚愕に蝕まれた身動きの取れないローレンにサイカは容赦なく狙いを定める。中腰になり右手を掌底の形にし、落下してくるローレンの胴体へ向けて掌底を放つ。震脚を十全に響かせ、異様なまでに腰に肩に腕にと捻りを加え、その掌底は螺旋を描き容赦なく敵手を穿った。

「ッグハ！」

鈍く響く重い轟音。

吐血しながら地面を転がって行くローレン。

外傷以上に内傷を与えるあの技の前には、岩並みの防御力も分が悪かったと見える。

そのまま血を口から振りまきながら転がり続け、ローレンがようやく止まった頃には、彼は白目を向いて意識不明に陥っていた。しかも口からの吐血はまだ止まっていない。

(あれ……これ、もしかして殺っちゃった?)

さつと血の気が引く。嫌な汗が湧き、焦るサイカ。

実際にローレンは内臓を圧潰されて割と危険な状態である。もし彼が魔人という種族でなく人族だったら即死だったかもしれない。

そんな状況の中でアーシエは慈愛に満ちた笑みを我が子に送り、ポンつと肩を叩いた。

「頑張つて手加減……身に付けましようね！」

「それ所じゃないよね母さん!？」

サイカの言葉は正論だが、悲しいかな貴方が犯人である。それからアーシエは混乱していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8285w/>

道化の造った英雄譚

2011年11月3日01時21分発行